

今やらねば

田中館愛橋の生涯

①



二戸から世界へ

「今やらなければ殺されると思え」

なんとも物騒に聞こえるこの言葉を言った人物は田中館愛橋博士。わが二戸市が世界に誇る偉大な物理学者である。

言われた相手は、当時1910年ごろ、ドイツに留学していた弟子の寺田寅彦。

ある国際会議で発言した田中館のドイツ語を聴いて寺田はこうからかった。

「館先生、勢いは宜しいのですが、少々乱暴なドイツ語ではありませんか」

すると田中館は真面目な顔でこう答えた。

「聞かれた相手に直ちに答えようと思ったら、テニヲハなどにかまっておられるか。今やらなければ殺されると

思え」

後に作家、物理学者になった寺田は、『館先生はいつも日本を背負って、死ぬ気でやってらっしゃるのだ』としみじみ語っている。

寺田は地震、航空、ローマ字など田中館の研究のほとんどにかかわっていて、生涯交流があった。

田中館愛橋（1856～1952年）は、岩手県の福岡町（現二戸市）出身。「日本物理学の祖」、「種まきの翁」と言われた彼の活躍は、明治、大正、昭



文化人切手になった田中館愛橋の写真(シビックセンター提供)

和の三代に渡る。

日本人初の地球物理学者、東京大学名誉教授。岩手県人で初めての文化勲章受章者（1944年に地球物理学と航空学の功績）貴族院議員も勤め、晩年には日本を代表する科学者として多くの国際会議に出席した。

田中館の仕事は実に多岐にわたっている。工学や電磁気学の単位の研究に始まり、メートル法（度量衡法）の確立や、地震学の確立、航空学の発展、気象学の普及など、日本の理科系諸学の基礎を築くと共に、多くの弟子を育てた。

熱心な「ローマ字」論者で文化人切手（2002年）にもなっている。

田中館は盛岡藩の武家の長男として生まれるが、少年期に明治維新が起こる。日本が「西洋に百年遅れている」と言われた時代に青年期を迎え、「西洋に追いつき追い越す」ために必死で働いた壮年期。老年期も「日本の国際化」に一役買い、晩年もなお精進を重ねた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇
西洋列強に負けない誇りある日本を

築くためにささげたすさまじいまでの

生き方は、語らずして多くの人間を教え、育て、導いた。日本の科学の発展に尽くし日本人に自信と誇りを与えた田中館は95歳で亡くなったが、没後60年が過ぎた現在も二戸市民に愛され、誇りとなっている。その足跡をたどる。（中村誠 田中館愛橋会事務局長）

【ミニコラム】

あいきつ「愛橋」は他人が命名

初めにつけられた名は彦一郎だったが、出生届のために2日をかけて盛岡の藩の役所に届け出に行くと、南部藩主の家族名に重なりと帰された。2度目の名も改められ、見かねた代官の中島六郎兵衛が中国二十四孝「陸績」の故事から「愛橋」と名付けた。

◎このコーナーは、平成25年5月13日に、デリーー東北に掲載された記事を転載しています。

◎今月から、市民の皆さんに博士の生涯や功績について再認識していただくため掲載します。